

もうすぐ二十歳 どろんこサッカー



篠山クラブ会長
岡原 浩

● 篠山クラブの結成と取り組み内容



鯉のほり渡し

もう19回を数えた、どろんこサッカーを企画開催しているのは、愛媛県最南端の日本が一番空港に遠い町、愛南町正木地区の篠山クラブ(会員40名)です。篠山クラブは、川を境に隣接する高知県宿毛市山北地区と愛南町正木地区を併せた篠南地区の20代から50代の男性40名で昭和50年4月に結成され、「県境を越えて助け合い、互いの未来を考えよう」を基本理念に活動しています。

篠山クラブでは、篠山や篠川の環境美化活動、スポーツ行事への参加、県指定無形文化財「正木花取り踊り」等の伝統芸能や文化の伝承、そして30年前から毎年ゴールデンウィークに合わせ愛媛、高知両県をまたぐ200匹の「鯉のほり渡し」等、地区内の全ての事業を実施してきました。

しかし、従来の行事を消化するだけではつまらない、自然に恵まれた県境の地域をアピールしようと、みんなで毎晩集まり、酒を飲みながら話し合っって企画して始めたイベントが、平成3年にスタートした「県境篠山騒動どろんこサッカー大会」です。

● なんで「どろんこサッカー」

メンバーによる話し合いでは、地区の自然や歴史に基づいたイベントの方が、地区の人たちの共感が得られやすいことを基本に考えました。静かな山里である篠南地区の自然といえは山、川、そして田んぼです。歴史に目を向けると霊峰篠山は、室町時代から予土国境(伊予・愛媛・土佐・高知)の境界争い(篠山騒動)があり、1873年6月に終止符が打たれた経緯がありました。

ちょうどその当時、Jリーグが発足し、地元南宇和高校サッカー部の全国優勝と

いう快挙も重なり、「田んぼでサッカー」というイベント「県境篠山騒動どろんこサッカー大会」が企画されました。

● 地域の協力

イベントの企画はできても実際にどこで開催し、田んぼのコースはどこに作るか、クラブ員だけでは解決できない問題を、地元の区長や学校、そして田んぼの地権者の協力をいただき進めていきました。また、どろんこサッカーだけでなく、子供や一般の人たちも楽しめるように、どろんこフラッグ



どろんこフラッグス



餅まき



ス、どろんこウナギつかみ、お楽しみ抽選会、餅まき、猪うどん販売等、クラブ員だけでは到底まかないきれないプログラムを、クラブOB、婦人会、老人クラブ、地元小中学生に協力してもらい進めています。

これらの運営資金は、このイベントの趣旨を理解して頂ける方々の寄付金のほか、クラブ員が山や公園などの草刈り等を請け負って調達しております。応援や協力は仰ぎたいが、行政の補助に頼りたくないという気持ちで始めたどろんこサッカーですが、年々参加チームが増え松山市・高知市は言うに及ばず、関西や東京からもテレビ

番組制作のため、アイドルやお笑いタレントなどの芸能人チームの参加もあり、盛大になつております。盛大になれば余分に運営費が掛かり、景気後退により寄付金の減少は避けられず、6年前から愛南町より一部補助（フォトコン充当分）を頂きながら進めております。

● イベントの成果と継続秘訣

篠南地区は50年余り前より、日本一長い名前の学校「高知県宿毛市愛媛県南宇和郡愛南町篠山小中学校組合立篠山小学校（中）」として知られておりましたが、最近では「元祖」どろんこサッカー大会の篠南地区と呼ばれることが多くなりました。

こうした活動が認められ、平成7年度には愛媛県のふるさと愛媛創造賞を、また平成10年度には地域づくり団体自治大臣表彰をいただきました。篠山クラブの活動方針の中にある「だすい束」での活動が継続秘訣だと思われまます。

方言の「だすい」とは東が外れそうで外れない、束を立てると傾くが倒れない、これくらいなのやわらかい規則の中で、「やれる人がやれる事を、やれる時にやる、協力はしても強制はしない、努力はしても無理はしない」、イベントに携わるクラブ員の地元に対する愛着・こだわり・思い入れは、



試合風景



女子の部試合

どの地域にも劣らないと自負しています。

● 今後のイベントの継続の課題と展望

過疎化が進む篠南地区で、今まで通りのイベントの継続は難しくなってきましたが、これまでの流れを大事にしつつも変革しながら、自分たちのやれる範囲で気負わず頑張りたいと思います。

今年のどろんこサッカーのスタッフに、地元の大学生（19歳）が参加してくれ、どろんこサッカー第1回の年に生まれた子供が、一緒に同じイベントを出来ることに凄く感動しました。

これからの課題として、運営資金確保やクラブ員の世代交代などが考えられますが、経費節約や地元商品（篠山清流米や木工品）の開発企画、ボランティアスタッフ要請等も模索検討したいと思えます。

最後にイベントの成功・失敗は、入場者の数ではなく、イベントに携わった人たちがどれだけ感動したかが大切だと思っております。そして常に当初の思いやイベントの新鮮さを保つ難しさを感じています。また、どろんこサッカーを続けることで誰もが泥だらけ、汗まみれになつて笑いあうことができる地域づくりに取り組んで行きたいと考えています。